第 111 回公開シンポジウム

子育ち子育てエンパワメント ～コホート研究から～

◆プレゼンター　安梅勅江（あんめときえ）
筑波大学医学医療系教授／国際発達ケア・エンパワメント科学

◆パネリスト　春名節子
幼保連携型認定こども園本山北町あすのこども園園長・社会福祉法人子どもの家福祉会

◆司会　一色伸夫
甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 111 回「子ども学」講演会を始めます。エンパワメントとは、どういう意味でしょうか。エンパワメントとは、人びとに夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っているすばらしい、生きる力を湧き出させることです。ちょうど清水が泉からこんこんと湧き出るように、一人ひとりに潜んでいる活力や可能性を湧き出させます。子育ち子育てエンパワメントは、子どもに関わる人々の大切な役割です。その根拠をコホート研究から明らかにします。

今日はお二人のすばらしい先生に来ていただきました。簡単にご紹介させていただきます。まず、安梅勅江先生は、筑波大学大学院人間総合科学研究科教授、国際発達ケア：エンパワメント科学といった方面の日本での先駆者です。日本保健福祉学会会長、国際保健福祉システム学会会長も務めておられます。主な著書は、『根拠に基づく子育ち･子育てエンパワメント』『保育パワーアップ講座』『気になる子どもの早期発見・早期支援』『子育ち環境と子育て支援』『エンパワメントのケア科学』『コミュニティ・エンパワメントの技法』など多くの著書をお持ちの方です。もうお一人は、幼保連携型認定こども園本山北町あすのこども園の春名節子園長先生です。社会福祉法人子どもの家福祉会です。

それでは、さっそくプレゼンターの安梅先生からお話をいただきます。

安梅：皆さん、こんにちは。第 111 回の子ども学講義に呼んでいただきまして、一色先生、ありがとうございます。ここは学生の皆さんと、地域の皆さんがご一緒されているそうで、すばらしいですね。

さて、今日は「子育ち子育てエンパワメント」というお話をします。

まず、最初に一番大切なことをあげます。「湧活（ゆうかつ）」です（図１）。「人びとに夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っているすばらしい、生きる力を湧き出させること」を意味します。「エンパワメント」の和訳です。エンパワメントという日本語は、なかなか漢字にできませ

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

んでした。5年間ほど日中韓の研究者や実践者と討論し、ようやく「湧活」という漢字が漢字圏で理解できるということで使い始めています。

この定義の「人びと」を「子ども」に代えてみます。「子どもに夢や希望を与え、勇気づけ、子どもが本来持っているすばらしい、生きる力を湧き出させること」。これはまさに、保育プロに絶対必要な役割です。親御さんに置き換えます。「親御さんに夢や希望を与え、勇気づけ、親御さんが本来持っているすばらしい、子育てする力を湧き出させること」。これも保育プロの役割です。つまり、保育プロの役割は「湧活」といえます。

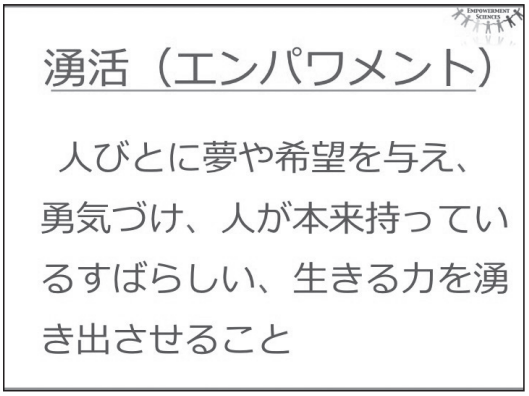

図1

副題に付けた「コホート研究」、これもあまり耳慣れない言葉かもしれません。もともとはローマ時代の軍隊が前へ前へ歩く一団を、コホートと言いました。そこから、時間軸に添って、赤ちゃんから幼児期、思春期、成人期、高齢期と追跡して調べることを「コホート研究」と言います。赤ちゃんからお年寄りまで人間はずっと成長していきます。コホート研究では、遺伝の要因、環境の要因に加えて、時間の要因を加えて調べることができます。たとえば、赤ちゃんの時と大学生の時では、同じ環境でも影響が違うはずです。時間を加味しながら影響を見られるというのが、コホート研究のすごいところです。

たとえば、ノーベル経済学賞を受賞したヘックマン先生は、コホート研究で就学前教育の大切さを明らかにしました。こども園、幼稚園、保育園などでしっかりと学んだ子どもたちは、30年後に学力検査をしてみると学力が高く、生活面で困難な状況に陥る割合が低かったのです。子どもの頃にさまざまな経験をする、学習する機会があると、将来におよび子どもたちが健やかに育つという根拠を出しています。一方で、福井大学の小児科の友田先生は、虐待の脳に及ぼす影響を調べています。虐待を受けた子どもは、脳の神経回路の発達に影響の出ることが明らかにされています。

私たちは4つのコホート研究を行っています（図2）。1つ目は「地域コホート」と呼ばれるもので、地域住民5千人を28年間追跡しています。2つ目の地域コホートは1万8千人を4年間、お年寄りだけを追跡しています。3つ目は、全国の幼稚園と保育園、こども園

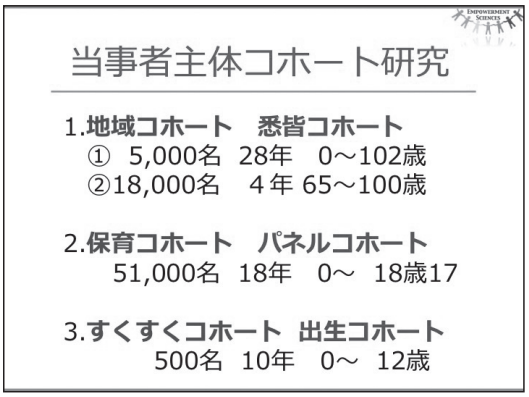

図2

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

に協力いただいて、「保育コホート」として5万1千人を18年間追跡しています。4つ目の「すくすくコホート」は500人を10年間、赤ちゃんのときから追跡しました。

その結果、明らかになったことのひとつが「ほめられる子どもは思いやりも育つ」です。あちこちのメディアに取り上げてもらいました。そんなこと、当たり前と思うかもしれませんが、科学的に証明するのは大変です。実験ブースを準備して、400組の親子を5年間、毎年来てもらい、積み木を積むところを観察します。「かかわり指標」という新しい評価指標も開発しました（図3）。

その結果、ようやくわかったのが子どもの社会性の発達に、保護者のほめるという行動が他の要因の影響を除いても関連するということだったのです（図4）。

幼児期の関わりが6年後の社会性に影響することが示されています（図5）。同年代の子どもを持つ知り合いとの交流機会が幼児期にあったり、親御さんが子どもを叩かないと回答していたり、親御さんに育児協力があると、子どもの向社会性、誰かの役に立ちたいなあという思いとか、情緒面での安定性がポジティブになっています。

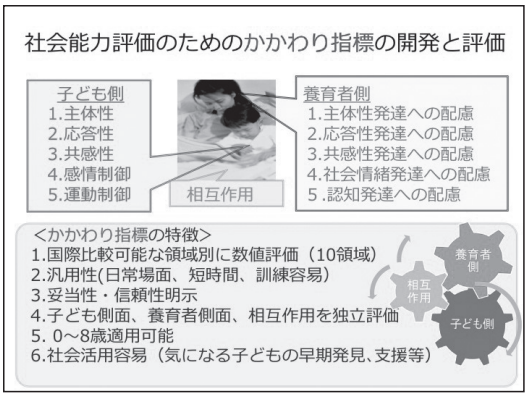

図3

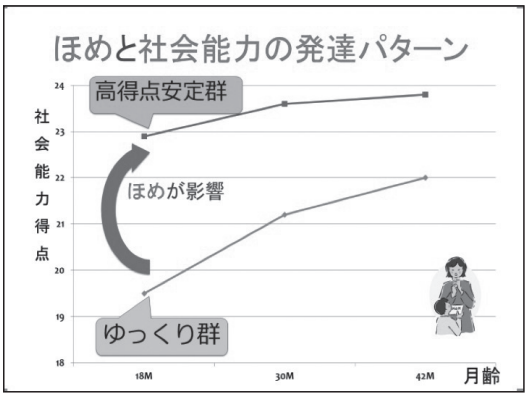

図4

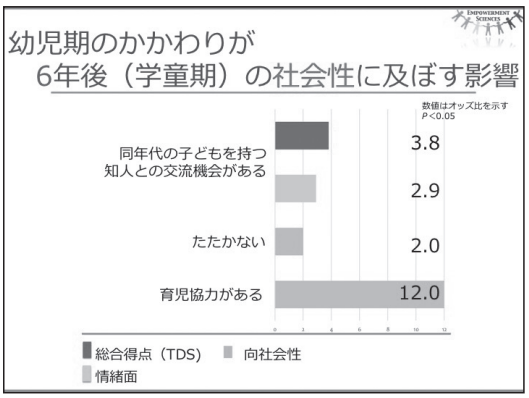

図5

「湧活」に必要なことは、何でしょうか（図6）。まず一つ目が「夢　希望」です。親御さんが子どもたちと一緒にいるのが楽しいなあ、子どもたちがすこやかに育ってほしいと思う、子どもたちがお母さんと一緒にいられて嬉しい、こんなふうになりたいと夢を持つ。そして二つ目が「自己効力感」です。自分はできるという感覚、自分ならやれると思う、子どもたちも、親御さんも当てはまります。三つ目が「意味づけ」です。むずかしい言葉で言うと「認知再構成」と言います。特段の配慮を要する親子は、自分で意味づけすることが難しい場合もあります。これから、皆さん、保育のプロになりさまざまなケースに遭遇します。そのときに、ぜひ「湧活」

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

の３要素を思い出してください。どこが満たされていないのだろう、どこにアプローチしたら「湧活」できるのだろうと考えてみてほしいのです。

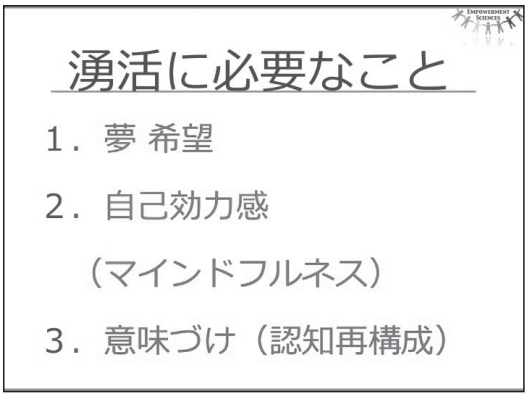

図６

「しなやかさを育むかかわり」には、どんなことが大切でしょうか。たとえば、信頼感、自己効力感、自信、安定感、参画する、自己実現、未来への見通し、つながり、意味づけなどが必要です。幼児期にこれらをしっかりと育てることが大切です。上手にほめることは、自己効力感を育むひとつのいい方法です。

「しなやかさ」というのは、物事に柔軟に対応しながら前向きに生きていける能力です。子どもたちは大人になる過程で必ずなんらかの困難に遭遇します。その際に柔軟に前向きに対応できる力を幼児期にしっかりと培うと、明るい未来が開けます。

「エンパワメントのツボ」は３点あります（図７）。

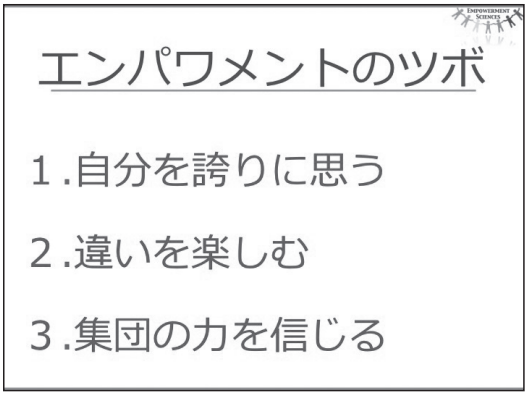

図７

一つ目が「自分を誇りに思う」。まず自分に自信を持てなければ、他人を配慮することはできません。二つ目が「違いを楽しむ」。自分と違う人がいたら排除するのではなく、障がいがあっても、いろんな国の人がいてもおもしろい、違うからこそすばらしい、と楽しむこと。三つ目が「集団の力を信じる」。みんなでやることが楽しいと思えることです。

エンパワメントには三つの種類があります。「自分エンパワメント」「仲間エンパワメント」「組織･地域エンパワメント」です。「自分エンパワメント」は自分で自分を元気にすることです。「仲間エンパワメント」は、仲間同士で支え合うことです。「組織・地域エンパワメント」はクラス全体とか、学校のイベントとか、地域のお祭りとか、みんなで元気になることです。

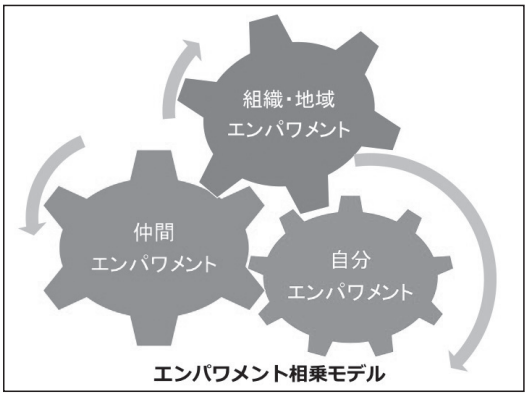

図８

重要なのはこれを組み合わせることです。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

「エンパワメント相乗モデル」と言います（図８）。たとえばなかなか「自分エンパワメント」できない親御さんがいたとします。その場合プロは「仲間エンパワメント」で仲間になって支え合いながら、そして園全体で親御さんと子どもたちを支える。「自分エンパワメント」「仲間エンパワメント」「組織／地域エンパワメント」を組み合わせて、相乗効果をもたらすことが有効です。プロはこの三つのエンパワメントを相乗的に使う必要があります。

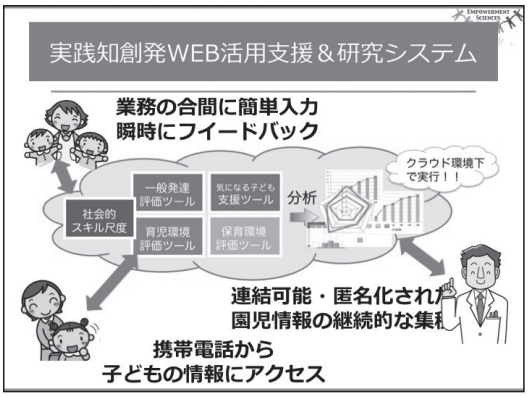

図９

私たちはWebを使い、世界中の専門職が根拠に基づく保育ができる仕組みを作っています（図９）。日本語版、英語版、フランス語版、中国語版があります。たとえば、ある園では保護者との面接のときに、グラフなどを親御さんにお見せして前向きな言葉で、「お子さんはここまでできるようになってきましたね、次にはこんなことができますね、一緒に楽しみましょうね」とパートナーシップを発揮する道具として使っています。「保育パワーアップ研究会」「子育ち子育てエンパワメントに向けた発達コホート研究」のWEBサイトを公開しています（図10、図11）。ここに今日お話した情報、ツール、発達チェックリストなど、いろいろな情報を掲載しています。日本中の保育士さんたちのブログなども入っていますので、ぜひお時間のあるときに見ていただきたいと思います。

図10

図11

私たちはすべての子どもたちをハッピーにしたいと思っています。子どもたちが、「世の中はがんばれば何か可能性が開ける（A world of possibilities）」と感じられること。何をやってもだめだという世の中ではなく、がんばれば夢がかなうと信じられる社会を作っていきたいと考えています。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

まとめますと、「子育ち子育てエンパワメント」は、「A world of possibilities」可能性を子どもたちが信じられる社会をつくり、「自己効力感　しなやかさ」を育んで、「つながり　意味づけ」、湧活社会の実現することです。

ぜひ、エンパワメント（湧活）という技を使って、これからプロとして皆さんに楽しんでいただけたら幸いです。

どうもご清聴ありがとうございました。

一色：安梅先生、どうもありがとうございました。すばらしい内容でした。実際に保育園や幼稚園の仕事に関わる学生たちにとって、非常にすばらしいお話をいただいたと思います。最後にご紹介くださったWebのページも、私も見ましたが、とてもいい情報が載っています。

では、次にパネリストとして別の角度で、春名先生からお話をいただきたいと思います。

春名：こんにちは。神戸市東灘区の幼保連携型認定こども園、本山北町あすのこども園の園長の春名と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。場所は、ちょうど甲南女子大学のバスターミナルの道を挟んで向かい側にあります。卒業生の方も4人働いておられますし、この中にはアルバイトや実習に来られた方もいらっしゃいますね。

今日は安梅先生のお話を大変興味深く聞かせていただきました。ありがとうございました。先生方の取り組まれているご研究が実際に現場での実務につながって、子どもたちの利益のために還元されていることがよくわかり、実際に私たちの園でも取り組んだり、考えたりしていきたいなと思いました。私は保育現場で働いていますので、保育現場で子どもたちのことを研究するのは、こういうふうにたくさんのデータを集めて行うのではなくて、保育を通して一人の子どものことを突き詰めて理解していくということで、普遍的なことにたどりつくという方法を取ります。安梅先生のお話くださったご研究は何万人もの子どものことから大切な道標をいただいたなと思いました。私たちと方法は違っても、子どものことや保育環境のこととか、子どもを取り巻く社会、保護者への子育て支援などにおいて、私たちが目標にしていることや願っていることと同じだと感じ、新たな角度からの根拠をいただいてありがたく思いました。

安梅先生のお話の中のほめること、認めることについて、そして認めることによって自尊感情や自己効力感を得ることができ、社会能力の発達が促進されるということがよくわかりました。最近、保育現場でも自己肯定感という言葉が大切にされています。今日は、聞いていただいているのが、これから子どもたちの教育、保育のお仕事に携わろうとされている学生さんたちなので、まず、保育の現場からほめること、認めることについて思うことを少しお話させていただきます。

子どもも大人もほめられることがとても大好きですし、心地いいことですよね。ほめて育てようとか、ほめる育児という言葉もよく聞きます。驚異のほめパワーとか、効果的な一言などいろいろな本も出ています。でも、ほめる言葉が素通りせずに、ちゃんと子どもの心に届くためには、条件がいると思います。ただほめればいいというわけではなく、先生も言われていましたが、ちゃ

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

んとほめること、ウソや偽りなくほめることは結構大変です。大人も同じで、皆さんもほめられて、これは本心かなと思ったり、ほめられてうれしいこともあれば、少し不信に思ったり反発したくなったりすることもあるかと思います。子どもも同じです。子どもは、とくに適当な言葉は信用してくれません。言葉は大切にしてほしいです。ほめる言葉とほめる気持ちが、先生の心の中で一致してないといけないと思います。

言葉ということにこだわって、少し話がそれますが、こんなことがあります。私の園の若い先生たちややってくる実習生の人たちに、「困っていることはありませんか」と聞くと、決まって言うことがあります。たとえば「ケンカしているとき、どういう言葉がけをしたらいいですか」「泣いているときは、どういう言葉がけをしたらいいですか」「言うことを聞いてくれないときは、どういう言葉がけをしたらいいですか」などです。たぶん「どういう言葉がけ」というより「どうしたらいいでしょう」という気持ちで質問されているのだと思うんですけれども、どの言葉が正解かと言葉を探しているように思うことも多くて、そんなに簡単で便利な言葉はないなあと思うことがよくあります。

そう思いながら私がお話するのは、「借りものの言葉は子どもには通用しないよ」ということです。方法として言葉を探すのではなくて、まずは気持ちや思いがあってこその言葉であること、そして、自分がその子どものために思うことを正直に言葉にすればいいんだよということを言います。でも、言葉にこだわらなくてもいいんです。黙って困った顔をしてそばにいるだけでもいいし、だっこして一緒に泣いてもいい。子どもは言葉で動くのではなくて、目の前の先生の気持ちで動いているんです。なんでかなあ、どうしたらいいのかなあ、といろいろ考えてみてほしいです。

そして、「ほめる」に似ている言葉で、「認める、寄り添う」もよく聞く言葉です。いろんなところで使われています。子どもがうれしいときや辛いとき、寂しいとき、どんなときも先生は子どもに寄り添います。先程の映像でもあたたかく寄り添う保育士さんを見て、いいなと私も思いました。でも、保育現場ではよくこんなことがあります。友達とケンカをして相手を傷つけてしまった、先生は理由を聞いて「そっか、あなたはそのおもちゃが欲しかったんだね。欲しかったから叩いてしまったんだね。わかったよ。でも叩くのはやめようね」というふうに言います。「気持ちはわかるよ」のスタンスです。気持ちや事情を汲み取ることは大事ですが、いつでもこれでいいんでしょうか。厳しく叱るのがいいわけではありません。でも、たとえばこの子が友達を傷つけたことで、この子自身も傷ついて悲しんでいる、後悔しているのなら、寄り添って認めて気持ちはわかるよと言ってあげたらいいんですが、その子が反省していなくて「私、悪くないし」「あれぐらいのこと」「わざとじゃないし」などと思っていたらどうですか。そう思っているのに、先生に「わかるよ」と受け止めてもらって寄り添われたら、大事なことをきちんと教えてやらなかったことになります。そんな甘い関わり合いの中で、この子は一体いつ反省したり、後悔したりするんでしょうか。反省や後悔はさせたらかわいそうですか。反省や後悔なしに子どもはどうやって本物の優しさや強さを知っていくんでしょうか。大人だって同じですよね。反省して後悔して

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

軌道修正して、前に進んでいくんです。そしてその心の痛みの分、優しく強くなっていくんだと思います。

自己肯定感という言葉ですが、自分を認めてもらって肯定されて、自己肯定感を持って相手を肯定する気持ちが育たない、そんなことにならないようにしないといけないなと思います。本当の自己肯定感とは相手に受容されて、自分を認めてもらうということだけでなく、一方で自分の周りとの主体的な関わり合いの中で、自分の心の痛みや葛藤を乗り越えたところにあるんだと思っています。

ほめることに話を戻します。子どもをほめるときにも、どうぞいろいろと考えてください。いろいろと考えるということが大切です。安易にほめるより、ぶつかり合って気持ちを交わし合って理解し合って、心から仲良くなって心からその子のことをすごいなと思ったときに、自分の本当の言葉でほめてあげてほしいと思います。「すごいね」「えらいね」「へぇ」など何でもいいんです。心からの言葉を使いましょう。そんな関わりができる先生がいいなと思います。

次に、主体性、生きる力ということに少しこだわって、思ったことをお話します。安梅先生のご研究によるすばらしい環境と支援の中で育てられていく生きる力というのは、とても主体的だと思いますが、育てられようとする子どもが主体的な資質を持っていればいるほど、用意されたその環境の中で変容していくことがむずかしいのではないかという気もします。子どももそれぞれ事情も気持ちもあり、好みも個性もあり、主体的な子ども程自我が強く、自我が強い子は自分で選びたがり、自分で決めたがり、そして自分でやりたがりますので、用意されるものにはしばしば反発し、本当に納得するというプロセスを経ないと、意図する方向へは心も体も動いてくれないのではないかと思うからです。

そして、これも保育の経験から思うことですが、子どもたちのために万全に整えられた子どもたちにとっての安心で安全な環境、安心で安全な大人、安心で安全なさまざまなことは、命を守るためにも情緒の安定のためにも、またさまざまな学びや力の獲得のためにも大切なことだとは思うんですが、たとえば、ワクワクドキドキする興味とか意欲とか楽しみとか、がんばる力、強い心、自立心、自分で見つける自己肯定感、そういうものがぐんぐんと育っていくのかなあと思うところでもあります。足りないものの中で工夫したり、どうにもならない状況を受け止めてすばらしさに変えたり、というふうなクリエイティブな歩みこそ、生きる力ではないかなと思います。

保育は教育保育要領の示すものをベースに持ちながら、毎日の日常の繰り返しの中で生身の子ども相手に生身の大人がともに成長、成熟しながら歩んでいくクリエイティブな仕事だと思っています。そして、それを通して目指すものは先生の言われることと同じ生きる力を、しなやかな力を育てることです。研究者の先生方のすばらしいご研究をもっともっと保育の現場に活かしていくために、私も客観的な学びを深め、ご研究と現場の整合性を強くしていきたいなと思いました。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

そして、最後にこの講演会のポスターに「根拠」という言葉があり、安梅先生は「根拠をコホート研究から明らかにします」と書かれています。私は自分の根拠をどこに持っているんだろうと考えたときに、それはやはり、目の前の子どもの育ちにあるなと思いました。子どもの笑顔であったり、子どものがんばる姿であったり、子どもの幸せそうな姿であったり、そういうものが私の根拠だなと思いました。これはいいときも悪いときも動かぬ証拠だなと受け止めています。保育は厳しいですけれども、ものすごくおもしろい、やりがいのある仕事だとあらためて思っています。今日は学びと考える機会をいただいて、どうもありがとうございました。これで私の意見を終わります。

一色：春名先生、どうもありがとうございました。現場で小さな子どもたちに毎日付き添って、いろいろなことを考えていらっしゃいましたね。お二人の先生方からとてもすばらしいお話を伺わせていただきました。

ここからは安梅先生のお話、春名先生のお話を積み上げていきたいと思います。では、まず安梅先生の方からおねがいできますでしょうか。

安梅：春名先生のお話、すばらしいですね。本当にその通りです。私たちのチームは、実はほとんどが実践の先生方です。実践の中にこそ知恵があります。私たちは実践から勉強し、それをまとめて、またフィードバックして意見をもらう。そのやりとりをもう30年近くやってきました。先生のように実践でしっかりと子どもたち、親御さんたちを見てくださっている方がいらっしゃることをとても誇りに思います。

一色：春名先生からは何かありますか。

春名：先程申し上げたことと重なりますが、私たち、保育現場におりますと、勉強と言いますか、大学の先生方のご研究に触れて、それを実際の現場に活かすということが、どうもおろそかになりがちで…。でも一生懸命学ばせていただくと、共通することがたくさんあったり、ぜひ取り組んでみたいことがたくさんあったりしますので、今日は本当に嬉しかったです。

一色：では、私の方から安梅先生に教えていただきたいのですが、「エンパワメント環境づくり」のところで、共感性、自己実現性、当事者性、参加性、平等性、可塑性、継続性など、その全体の枠組みについて、ちょっと簡単におっしゃっていただけませんか。

安梅：急にむずかしい話になりましたね（笑）。実は、その指標は8項目ありまして、どれだけエンパワメントが実現されたかなということをチェックする、ものさしみたいなものです。8項目のうち7項目は私が考えたものではなく、WHOがさまざまな国の健康状態が達成できたかど

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

うかを評価するための指標です。私たちが加えたのは「共感性」1 項目です。なぜか WHO の項目には入っていません。しかし、エンパワメントで一番大切なのは「共感すること」なんですね。一緒に悩み、笑い、泣くというところからエンパワメントは始まる。実践もそうですよね。子どもたち、親御さんたちとのパートナーシップが基本になります。

一色：わかりました。私の方で見たのは、「共感性」は自分の意志を持ちながら、他者にも同じように明確な意志があることを認める、そういうところが「共感性」としてとてもすばらしいと思ったのですが、大丈夫でしょうか。

安梅：はい、ありがとうございます。たくさん勉強してくださって。

一色：（笑）。これも『エンパワメントのケア科学』『保育パワーアップ講座』『根拠に基づく子育ち・子育てエンパワメント』などたくさん本がありますから、皆さんの中で見たい方がいらっしゃれば、私の研究室に来てもらって見ていただいて結構ですからね。

　では、学生の皆さんの方とインタラクティブに話を進めたいと思います。学生の皆さんで、このお二人の先生方にお話を伺った中で、何かコメントとかいただけますか。総合子ども学科の先生方もいらしてますので、先生方からでも何かありましたら。稲垣先生、いかがでしょうか。

稲垣：お二人の先生方、本日は本当にありがとうございました。私は子ども学で子育ち子育てを科学するということを考えております。文化的には子育ち子育てが脈々と受け継がれています。子どもの暮らしがあれば、母親父親の子どもとの暮らしが流れています。親子の暮らしの中で子育てがあれば、子育ちがあると、文化的には考えられると思うのです。親子の関係性から生じてくるものなのですが、それを科学的にどう評価し、科学的なエビデンスを出すかというすごくむずかしい問題があるのです。子ども学を提唱された小林登先生がそこをやっていきましょうと考えられました。科学的エビデンスを文理融合つまり文科系も理科系も学際的に一緒に考えていきましょうと考えられました。今日の講演の中で科学的なエビデンスと、現場の先生がなさっている子育ち子育てが、本当に融合したかたちで示され、まさに子ども学の根源的な話をしていただいたと思い、すごく心豊かになりました。

　私は、隣の女性と二人で行いましたが、私は大人を見ていました。二人で合わせても 10 個くらいしかなくて、我々年寄りは頭の固さがここで証明できましたねというエビデンスがありました（笑）。学生さんたちには、ぜひ柔らかい頭でこれを子どもと一緒にやっていただきたいと思いました。総合子ども学科のコンセプトは「子どもを学び、子どもに学び、子どもと学ぼう」ですが、今日まざまざと感じさせていただきました。本当にどうもありがとうございました。

安梅：ありがとうございました。（拍手、会場からも拍手）

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

一色：まだ時間があるので、学生の方から何かコメントをいただきたいですね。はい、今日の子ども学講演会でどんなところが良かったか。私のゼミの学生からいきましょう。

学生Ｈ：講演会を聞かせていただいて、私たちはまだ現場には実習でしか行ってないのであまりわからないんですけど、自分が素直な心じゃないと子どもには全部見えてしまっているし、これから湧活していきたいと思いました（笑）。

安梅：（拍手、会場からも拍手）

一色：一人が言ってくれたから、他にもどんどんね。

学生Ｉ：春名先生がおっしゃっていたように、保育園で実習しているときやアルバイトに行ったとき、子どもがケンカしてたり、泣いてたり、トラブルがあったときに、どうしたらいいんだろうとすごく困ってしまうことがあって、何か言葉ばかり探して、どう言ってあげたらいいかなとどうしても考えてしまってたんですけど、自分が思うこと、気持ちを大事にとおっしゃっていたので、これからはそういう気持ちを大事にして子どもと関わっていきたいと思いました。ありがとうございました。（拍手）

学生Ｊ：今日のお話を聞いて、実際に実習に行ったときに子どもにどう接したらいいかとか学びになったし、子どもに疑問をなげかけたりすることで子どもにも考えてもらえるし、それで考える力が発達していくこととかも学んだので、実習で活かしていきたいと思います。（拍手）

一色：はい、学生の皆さん、ありがとうございました。お二人の先生方、どうもありがとうございました。（拍手）

〈第二部〉

一色：お待たせしました。ここからは、地域の皆さんとともに先生方とインタラクティブに話をしていきたいと思います。まず、どなたか発言していただけますでしょうか。

一般Ａ：今日は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。私は本山北町あすのこども園の職員です。エンパワメントという言葉を今日初めて聞きました。エンパワメントの定義として書かれていることは、確かに現場でしていることであったり、こうなればいいなと願っていることだと思いました。客観的に研究されていることを学ぶ機会はあまりないので、いい機会でした。「ほめて育てる」という言葉が、ここ数年、躍り出てくるというか…、もちろん「ほめ

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

て育てる」ことは大事だなと思うのですが、それに惑わされてしまうというか、それが当たり前になって、気持ちがなかなか沿っていかないのに言葉だけで子どもを動かそうとするようなことが、子育ての場や現場で起こっているとちょっと悲しいなと。先程、安梅先生がおっしゃったように怒るときには怒る、それが子どもを見ているということですよ、とか、春名先生がおっしゃっていた気持ちがあってこそだということなど、伝えていっていただけたら嬉しいなと思いました。

安梅：保育実践の場で保育士さん、幼稚園の先生たちが果たす役割は大きいです。ぜひ、親御さんが「子どものがんばりを認める」という視点でほめるモデルとなる関わりをしてほしいと願っています。

春名：ほめることについて、子どもの側から見たらほめられて嬉しいけれど、ほめることが評価につながってしまって、ほめられない、失敗したことが悪いことだと思ってしまうところがあったりもします。また、先程の先生がおっしゃったように、ほめることによって子どもを操作しようとするような、大人としてちょっとずるいなと思うこともあります。それと、保護者の方とお話していて「ほめるところがないんです」と言われることがありますが、私は「かわいいな」と言ってあげてくださいと言っているんです。「かわいい顔やね」「かわいい手」「かわいい足」「かわいい動き」と、そこからほめればいいですよという話をすることがあります。

一般A：私自身も子育て中で、高校２年になる娘がいるんですが、この間、アルバイトでよくやったなと思うことがあったのに、「私のこと、誰もほめてくれへん」とつぶやいていて、でも、それもどうなのかなと思い、「何もほめられてすることばっかりやないんよ」と言ったんです。子どもも社会全体がほめられて、ほめられて…みたいな状況になると、その状況に自分があわなければ、「なんでなんやろう」と思ってしまうこともあるんだなと。娘がとても腑に落ちない顔をしていたので、実際はどうだったのかなと。ほめられることばかりだと、子ども側もほめられないとなんでかなと思ってしまうこともあるのかなと思いました。

安梅：「ほめる」ことの根本は「認める」ことです。何か表層的に喜ぶことを言うこととは峻別する必要があります。「認められる」ということは、人間が生きていく上で、お年寄りであろうが大人であろうが子どもであろうが、絶対に必要なことです。きっとお嬢さんは「私のがんばりを認めてほしい、誰か認めてよ」と言いたかったのではないでしょうか。だからお母さんとしては「うんうん、がんばってるね」と認めてあげればいいのではないでしょうか。

一般B：この講座は何度も聞かせていただいて、いろいろな先生方のいいお話を聞かせていただき、喜んでいます。私は若いときは児童福祉の子どもの関係の仕事をしておりまして、定年後、地域にあります里親里子の支援ボランティアをしているんです。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

安梅：すばらしいですね。

一般Ｂ：今日の、このエンパワメントという言葉にすごく惹かれて聞きに来ました。というのは、里子の子どもたちは先生がここでおっしゃっていることとまったく逆なんです。生きる自信がない、自分のことを誇りに思えない、違いを楽しむということでも、みんなと違ったら困ると思ってしまう、みんなと一緒に必死で生きていきたい。集団の力を信じるということについては、養護施設で育ってきている子どもが多いですから、年上の者に言われた言葉はそのまま命令として受け取って、年下の者がそういう命令に違反したら許せないとかね。先生がおっしゃった生きる上での柔軟性の始まりとかね。ほめることについても、生まれてからほめられることを知らない、虐待されるとか、ネグレクトされていた子どもが、幸い施設から里親さんに引き取ってもらって、うまくいい里親さんと巡り合った子どもはすごく成長するというのを見ています。その中で、社会能力の発達パターンなども一つひとつゆっくりですけれども、里親さんの元でいろいろ学びながら育っていっている。そういうようなことを実感しています。今日、先生がお話されたエンパワメントについて、子どもたちにどういうふうに生きる力を育むことをアドバイスしようかなとか、どういう関わり方がいいかなと考えながら、聞いていました。春名先生の現場のお話なども。

それと、里親里子とはちょっと違うんですけれども、僕らが仕事していた頃は、４組に１組ぐらいが離婚されるという状況でしたが、今はもう３組に１組ぐらいが離婚されている。そのうち３分の１近くが再婚される。子どもを持つ親同士が再婚されるステップファミリーがどんどん増えてきていますので、それぞれの子どもたちの中には新しいお父さんお母さんとうまくいかなくて、一緒に暮らせないから施設にいく。そういう子どもも里親さんと出会って一緒に暮らしている場合も出てきている。今の日本のいろいろな状況で、そういう子どもたちが保育園や幼稚園でもいっぱい増えてきているんじゃないかと思います。

私が言いたかったことは、里子の子どもたちは、底辺のまだ下からちょっとずつ成長していかなあかんというのがありますので、先生がおっしゃったエンパワメントをしていくための示唆を教えていただけたら。

安梅：すばらしい活動をされていますね。私たちの追跡調査の中で虐待を受けた子どもたちが、その後どんなふうにすくすく育つのか、どんな条件を整えれば、そういう不幸な経験をしてもすこやかに育つのか、ということを検討しました。私たちの研究でも海外の研究でも、誰か親以外の信頼できる大人が一人でもいれば、支えられることがわかっています。保育園、幼稚園の先生、祖父母、近隣者でも誰でもいいのです。誰かが自分を認めてくれるということを確信できれば、先程、一番にあげた「自分を誇りに思う」部分がきちんと育ちます。まず、そこが育たないと「違いを認める」「集団の力を信じる」ところにいきにくくなります。先生（一般Ｂ）のような方がまず、そういう方たちの心の礎となって、信頼できる大人がこの世の中にいるんだとわかってもらえたらいいと思います。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

昨今はしんどい親御さんがたくさんいて、どうしても子どもに寄り添うことがむずかしい場合が多々あります。そのときに、子どもたちの最善の利益を守るためには、保育園の先生方が「子どもを認める存在」になることです。保育の先生たち、そして先生方（一般Ｂ）にとても期待しています！

一般Ｂ：先程見せてもらったビデオの脳の部分で、やはり、虐待されている子どもの脳にはちょっと線が細いというのが出ていましたから、これを太くしていかなあかんなとよくわかりました。ありがとうございました。

春名：一人でも親以外に子どものことを認めてくれる存在というのは、私たちが担わなくてはいけない役割だなと思います。むずかしい子どもを保育したこともありますが、虐待を受けているとかそういうことではなかったんですが、その子のことを心からかわいいと思い、どんなことをしても受け入れて、大好きと思って、そういう関係ができたときに子どもは変わっていくのだと経験しました。ですから、やはり、子どもは一人でも自分のことを認めてくれる存在がとても大切なのだと思います。

一般Ｂ：里親さんは里子の子どもが目の前で「育ててくれてありがとう」と言ってくれたら、それほど嬉しいことはないんですね。でも子どもの方は、自分の親が育てられないのに里親さんが育ててくれる、ありがたく思っていても里親さんの目の前では絶対言えないんです。ただ、里子のこどもたちがいろいろと作文を書いているんですが、文章にすれば「私をここまで育ててくれてありがとう」とか「私を育ててくれて感謝しています」とか「本当の親だと思っています」とか、文章では出せるんですね、気持ちを。でも言葉ではなかなかよう出さんのです。私たちは、そういう里親さんたちのすばらしさを伝えたく、活動の啓発などいろいろなイベントも地域でやっているんですけれども、そんなところからちょっとずつでもわかっていただけたらと思っています。おっしゃるように、地域の人で子どもが信頼できるいい大人と出会うことが、子どもにとって成長を高めることだと思います。ですから、施設ができるだけ地域に出て行って、子どもたちがいろいろと関わりを持てるように、ボランティアで、里親会が中心なんですが、児童相談所がバックアップしてくれて、啓発をしていく中で理解を求めているという実情なんですけど。

一般Ｃ：今日はありがとうございました。エンパワメントは興味のある言葉で、以前から知っていたんですけれども、私が思っていた意味とはちょっと違っていて、ああ、こういうことだったんだとあらためていいことだなと思いました。またビデオの中の先生が本当に子どものこと、お母さんのことを考えてサポートしている姿を見て、あの先生の園全体でどのようにサポートしていくか、エンパワメントしていくか、たぶん考えられて進めていかれてるのかなあと思いました。できるサポートはとても大切で、それがお母さんに対するサポートイコール子どもの成長や発達

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

に関わっていくんだなとあらためて思いました。「子どもをほめる」という言葉だけが、最近一人歩きしてしまっているので、子どもを注意しない親御さんというのも多く見るので、そこをほめるところはほめて受け止めて、見てあげることも大切、プラス先生がおっしゃっていた叱るときは叱る、その両方が大事なんだと伝えていきたいなと思いました。ありがとうございました。

一般Ｄ：今日はありがとうございました。私も、今、本山北町あすのこども園で働かせていただいています。ビデオのことがとても印象に残っているんですが、保育士になって数年働いていた別の保育園で、お風呂に入れてあげた子がいたなと思い出しながら見ていました。そのとき、すごくしんどい思いをされている保護者の方のサポートというか、どういうふうにしたら子どもたちのためのなるのかなあと、そのとき一緒に仕事をしていた先生方とも話し合いながら対応していたことを思い出していました。子どももそうですが、保護者の方に対しても、今、何が大事なのかと考えて関わっていくことが大切だとあらためて思いました。それから、ビデオを見ながら子どもたちや大人のほめるところを探すとき、私はあまりたくさんは見つけられなかったんですけれども、その中で思ったのが、人を認めることについて、日頃、人と接する中でその人のいいところを見つけていくことが認めることにつながっていくのかなとも思いました。

一般Ｅ：私は心理学科で心理学の勉強をしています。子ども園のビデオで、子どもや母親ががんばっているところを見つけるというのが、私もちょっとできなくて、これから、できれば対人援助職員に就きたいと考えているので、相手の立場に立って、こういうところを頑張っているんだなと見つけられるよう気づく力がとても大切なんだと思いました。ありがとうございました。

一般Ｆ：先生方に貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。私は兵庫県の明石で子育てボランティアをしています。双子ちゃんとの交流で、双子ちゃんの場合、お母さんが一人は抱っこできても、もう一人はそばに寝させている状態になってしまいます。ですから、必ず、そのもう一人を私が抱っこして常に話しかけているんです。そうすると赤ちゃんは赤ちゃんなりに口元を動かして、今にもおしゃべりしそうな口元になるんです。双子ちゃんのお母さんの日々の大変さ、その胸のうちを聞くことはできます。私は双子を育ててないから、アドバイスまではちょっと無理かなと思いながら聞いています。お母さんたちは帰るときには「ありがとうございました」の一言で帰っていきますので、これで良かったのかなと思っております。

赤ちゃんの４カ月健診が保健センターであるんですが、ここでもボランティアとして受付を手伝っております。そこで１回につき80人程の赤ちゃん一人ひとりに「こんにちは」と声かけします。すると赤ちゃんはにこっと笑うんですよね、泣くかなと思ったんだけど。きれいな瞳にこちらが吸い込まれそうな気持ちになります。健診が終わったら、じっと顔を見て「バイバイ」と言ったら、またにこっと笑いますので、これまたなんてすてきなことなんでしょうと思ったりもします。それから、子どものプレイルームが市にできたんですが、０歳～５歳までと５歳以上とにお部屋

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

が分かれています。私は小さい子たちの方にいるんですが、ままごとをしている４歳児、５歳児になりましたら、お母さんの姿、言葉遣い、もうそのもの、そっくりが子どもさんに出てくるんですよね。あ、お母さんがこう言っているんだな、こういうふうにしているんだなと、見ながら、私も時々ままごとの中に入るんですが、お母さんは気を付けないといけないことがいっぱいあるんだなと思いました。お母さんは赤ちゃんの泣き声を聞いて、何を訴えているのかキャッチしなかったら、赤ちゃんが怒りっぽなしになって、自分が思っていることも言えないような子どもに育ってしまうんかなと思う時もあります。こうして子育て支援のお手伝いができることを嬉しいなと思って、日々癒されております。

一色：皆さん方、どうもありがとうございました。長時間になってしまい申しわけございませんでしたが、今回の講演会は保育に関してのエンパワメントというところがベースでした。私なりに言いますと、エンパワメントの本もいろいろ見まして、どんなときにも子どもと保育者の最善の利益を守るというのが、非常にいい言葉だなと思いました。今後も認定こども園、保育所、幼稚園など、いろいろな場で先生方とご一緒にやっていただきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.